

## 長野県内に派生したスイス風建築とスイス的な風景（１）

● 河 村 英 和

### １．スイスに擬えられる信州・長野県－「日本／東洋のスイス」という言い回し

長野県・信州の風景はしばしばスイスに喩えられてきた。それはいつごろからでどれほどのパリエーションがあったのだろう。日本の自然風景や景観を「日本のスイス」あるいは「東洋のスイス」と評するのはすでに戦前からあった。会津若松の遠藤十次郎（1864-1934）は1920-30年代に裏磐梯の緑化・開発を「東洋のスイス」を念頭にして植林を進めていたし、1910-20年代の出版物のなかで「日本の瑞西（スイス）」と喩えられたものには、スイスの湖畔がイメージしやすい日光中禅寺湖<sup>1</sup>、牧歌的景観から、現在都内で唯一残る村として知られる檜原村<sup>2</sup>、そして山景豊かな甲信地方（山梨と長野）がある。地質学者の脇水鉄五郎（1867-1942）は、1921年に甲府で行われた庭園協会での講演のさい甲信を「日本の瑞西」と呼び、「我日本の如き國の中央に瑞西に劣らぬ天然の景勝地あり」と絶賛し、最後は「日本は東洋の瑞西なり」と締めくくっている<sup>3</sup>。一方『日本風景論』（1894年）の著者として知られる志賀重昂（1863-1927）は、『世界の奇観』（1928年）のなかで仁科湖（長野県大町市にある3つの湖「青木湖、中綱湖、木崎湖」の総称）をスイスの湖に見立て、青木湖の写真を掲載し、興奮気味に次のように述べている。

「水澄み渡りて青く深く、岩上の絶壁には白樺、樗など半寒帯の草木茂り、凄味十二分、壁を超えて白馬、杓子、槍ヶ岳、蓮華等日本アルプスの峻嶺は雲を截りて聳え、雪白の絶頂は宛がら天を刺すが如く、氣象森嚴、予をして覚えず『日本の瑞西此処に在り』と絶叫せしめぬ」<sup>4</sup>。

志賀重昂のスイスの風景のイメージは、山岳だけではなく湖との組み合わせであった。同書中、具体的にスイスのどの町に擬えたのかも表明しているが、それは名峰ユングフラウを望みトゥーン湖とブリエンツ湖の中間に位置しているインターラーケン Interlaken である<sup>5</sup>。つまり志賀は、日本アルプスを背にする長野県大町を、「日本のインターラーケン」と評したので<sup>6</sup>。何よりも「日本アルプス」という呼称は、1881年に駐日英大使アーネスト・サトウ Ernest Mason Satow (1843-1929) が編纂した日本案内書『中央・北日本旅行者のためのハンドブック A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan』の中で、初めて登場した。在日英国人技師ウィリアム・ゴー

1 伊藤銀月「日本の瑞西と日本のベニス」、『日本風景新論』前川文栄閣、1910年、pp. 139-141.

2 高頭敏之助「日本の瑞西檜原村」、『地理教材研究会』地理教材研究第12輯、目黒書店、1928年、pp. 189-194.

3 脇水鉄五郎「甲信は日本の瑞西なり」、『庭園3（8）』日本庭園協会、1921年、pp. 2-6.

4 志賀重昂「日本のラインと日本の瑞西」、『世界の奇観』、『志賀重昂全集第5巻』志賀重昂全集刊行会、1928年、pp. 388-389.

5 とはいえインターラーケンが1978年に姉妹都市提携を結んだ日本の町は、仁科湖のある長野県大町市ではなく、琵琶湖を望む滋賀県大津市だった。姉妹都市提携協定書 [https://www.1g-reiki.net/city.otsu/reiki\\_honbun/x\\_400\\_RG\\_00000724.html](https://www.1g-reiki.net/city.otsu/reiki_honbun/x_400_RG_00000724.html)（2021年1月16日閲覧）

6 志賀、前掲書、pp. 400-401.

ランド William Gowland (1842-1922) が担当した執筆箇所<sup>7</sup>、越中から飛騨(針ノ木峠を超えて信濃大町から富山へ行くルート)について、「東のこれらの州をまたぐ範囲は(日本)帝国で最も特筆すべきで、日本アルプスと表現できるだろう The range bounding these provinces on the East is the most considerable in the Empire, and might perhaps be turned the Japanese Alps」と書かれていた<sup>8</sup>。もちろん「日本アルプス」は信濃・信州に限定されるわけではないが、その主要なエリアが長野県に属していることには変わらない。英国人宣教師ウォルター・ウェストン Walter Weston (1861-1940) は、まさにこのガイドブックに記された「Japanese Alps」という言葉に心惹かれ神戸の自宅を出立した。その顛末を旅行記として纏めたのが『日本アルプスの登山と探検 Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps』(1896年) —以下『日本アルプス』と略す—で、この本の題名から「日本アルプス」という呼称が定着したのはよく知られている。もちろん本書でも日本アルプスは長野に限られるわけではなく富山や岐阜も含むが、軽井沢から始まり上高地など、信州・長野県の山々を巡る記述がその大部である。ウェストンはこの本の序文をスイスの高山エッグスホルン Eggishorn で書き、本文中で次のように長野の山々をスイスの名山に見立てた。

『『槍の山頂』こと槍ヶ岳は日本のマッターホルンで、優雅な三角形をした常念岳は、ペンニネアルプスの女王ヴァイスホルンのミニチュア版のようだ。Yarigatake, the “Spear Peak,” the Matterhorn of Japan; Jonendake, with its graceful triangular form, that recalls in miniature the Weisshorn, queen of the Pennine Alps』<sup>9</sup>。

またウェストンは、1905年に設立された日本山岳会に捧げられたその続編といえる『極東の遊び場 The Playground of the Far East』(1918年) の中で<sup>10</sup>、「上高地は、将来の北(日本)アルプスのツェルマット Kamikochi, the future Zermatt of the Northern Japanese Alps」と書き<sup>11</sup>、白骨温泉にある鬼ヶ城という岩窟は、「カンデルシュテークの上、ゲンミ峠越え道にあるガシュテレンタール上方の高い崖を小さいサイズにしたよう recalling on a smaller scale the cliffs high above the Gasteren-tal in the Gemmi route above Kandersteg」と喩え、そこには「ロマンチックな美 The romantic beauty」があると絶賛した<sup>12</sup>。ウェストンの文章には随所に「ロマンチック」や「ピクチャレスク」といった言葉が頻出する。つまりウェストンは常に、英国人の間で馴染みのあるサブライム(崇高)とロマンティシズムで派生したピクチャレクの美意識を尺度に、日本

7 Nobuko Fujioka, *Vision or Creation? Kojima Usui and the Literary Landscape of the Japanese Alps*, in *Comparative Literature Studies*, vol. 39, no. 4, East-West Issue, 2002, p. 282.

8 Ernest Mason Satow and A. G. S. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*, Kelley & Co., Yokohama, 1881, p. 265.

9 Walter Weston, *Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*, John Murray, London, 1896, p. 16. 邦訳: ウォルター・ウェストン(岡村精一訳)『日本アルプス—登山と探検』(平凡社ライブラリー94), 平凡社, 1995年を参照したが, 本論中の訳は拙訳を使用している。ウェストンは槍ヶ岳について、また別の箇所で「槍ヶ岳は、日本のマッターホルンの縮小版 Yarigatake, the miniature Matterhorn of Japan」と繰り返している。Weston, *op. cit.*, 1896, p. 88.

10 『極東の遊び場』の邦訳は、ウォルター・ウェストン(水野勉訳)『日本アルプス再訪』(平凡社ライブラリー161), 平凡社, 1996年を参照にした。

11 Walter Weston, *The Playground of the Far East*, John Murray, London, 1918, p. 33

12 Weston, *op. cit.*, 1918, p. 217.

の山岳にアルプスの美を見出していたのだ。スイスの観光と登山が英国人によって開拓されていた時代に通じる感性で<sup>13</sup>、スイスの景色と日本アルプスを比較するウェストンは、先の書『日本アルプス』で、「日本の山々でいつも残念と思う点は、スイスアルプスではお馴染みの丘陵の牧畜がいないことである。the absence of cattle on the hillsides, so familiar to us in the Swiss Alps, will always be a disappointing feature of the mountains of Japan」とも述べるのは<sup>14</sup>、牛の存在がピクチャレスクでロマンチックな風景に必要であるからに他ならない。18世紀後半以降興隆したピクチャレスクな英国の風景式庭園 Landscape Garden では、牧歌的な風景を演出するため、あえて牛を庭園内に放していたことを思い起こさせるようなコメントである。

ウェストンは長野県外についてもスイスに似た場所をいくつか挙げている。岐阜県高山市の平湯温泉を、「日本のすべての山間集落の中で、最もスイスに似ているのが平湯である。Of all the Alpine hamlets of Japan, Hirayu is one of the most Swiss in appearance」と述べ<sup>15</sup>、富山県の剣沢には、「ベルナーオーバーラントのラウターブルンネンとレッチェン溪谷の間のシュマドリヨッホの溝に幾分似ている岩でくり抜かれた道 a rocky gateway somewhat resembling the gap of the Schmadri-joch, between the Lauterbrunnen and Lötschen valleys, in the Bernese Oberland」があるという<sup>16</sup>。つまりウェストンは、崇高な要素（スリリングな自然景観：滝や溪谷、断崖）がある景観に魅せられて、ロマン主義時代の英国人たちが好んだスイスの景勝や地名を思い起こしてくるのだ。山梨県の芦安集落について、「芦安に点在するシャレーは、荒々しい急流の川床の上に張り出した険しく崩れた岩棚すれすれに、しがみつくように建っている。まさに絵のように美しい場所だ。the scattered chalets of Ashiyasu cling with difficulty to the steep and broken ledges that overhang the wild torrent bed. It is a picturesque spot indeed」と言及しているのも同様で<sup>17</sup>、スイスに特徴的な山小屋風建築であるシャレー chalet も、アルプスのピクチャレスクな景観を彩るために重要な要素だからである。ウェストンは『日本アルプス』のなかで、長野県の本曾福島宿屋から見えた眺めを、次のように描写している。

「ここ松田屋旅館では、ピクチャレスクな橋の下を流れる本曾川の愛らしい景色が望め、岩を重石にした張り出した庇のある茶色い小屋はスイスのシャレーを想起させる。The Matsutaya inn here affords a lovely view of the Kisogawa flowing under its picturesque bridge, by brown cottages, whose overhanging eaves, weighted with blocks of stone, recall the chalets of Switzerland」<sup>18</sup>。

シャレーのある牧歌的なスイスの風景に似ていることは、ウェストンにとって重要な付加価値なのだ。また駒ヶ岳でウェストンは、「スイスによくある山岳会の山小屋を思い出させる建物を見つけた we discovered an erection that reminded us of the familiar club huts on Swiss mountains」という<sup>19</sup>。このように、スイスの山小屋建築に似たものが日本アルプスですでに散見され

13 河村英和『観光大国スイスの誕生－「辺境」から「崇高なる美」の国へ』（平凡社新書692）、平凡社、2013年、pp. 50-70；pp. 106-114。

14 Weston, *op. cit.*, 1918, p. 9.

15 Ibid., p. 172

16 Ibid., p. 203.

17 Weston, *op. cit.*, 1918, p. 75.

18 Weston, *op. cit.*, 1896, p. 43.

ていたことは、本論のテーマであり後述する長野県内に戦後～バブル期に盛んに建設されていったシャレー・山小屋風の宿泊施設群や、スイス建築風の公共の建物への伏線にもなろう。ただし、戦前のように必ずしもピクチャレスクでロマンチックなものばかりではなく、戦後のものはときにはチープでキッチュな場合も少なくない。

戦前のウェストンのピクチャレスク観や志賀重昂の風景論の立場とは打って変わり、戦後まもなく日本国そのものを「東洋のスイス」に擬えることが知られたことがあった<sup>20</sup>。しかし、これは永世中立国として大戦中に平和を貫いたスイスを模範にするという意味で、マッカーサー元帥が日本に「太平洋のスイス」または「極東のスイス」を志すよう提言したことに端を発した政治的見解に過ぎない<sup>21</sup>。一方産業と山岳景観の両立ということから、経済発展の視点から「日本のスイス」を目指そうという考え方が、北海道と長野県で1950年代に起こっている。大坪徹心（生没年不明）という人物は「日本のスイス 北海道」という章を自著『こうすればよくなる』（1956年）の中に設け、北海道の経済発展の可能性を力説した。大坪によれば、誰もが阿寒国立公園の景色をスイスのようだと感じ、とくにサンモリッツに似ており、今は産業がさほど開発されていないが伸びる余地が、酪農と観光の面でスイス以上にあると意気込んだのだ<sup>22</sup>。しかし軍配を上げたのは長野県であった。

長野県は1950-60年代の高度経済成長期、山々に囲まれた諏訪地域に、自動車、カメラや時計などの精密機器メーカーが集まったことから、「日本のスイス」あるいは「東洋のスイス」と呼ばれるようになり<sup>23</sup>、このキャッチコピーには県も意欲的だった<sup>24</sup>。早くは、スイスが誇る産業の一つであるオルゴールのムーヴメント製造を得意とする三協精機（現・日本電産サンキョー）が、1946年に諏訪市で創業していた<sup>25</sup>。さらに戦禍を逃れ京浜の時計・光学工業が長野へ移転し、「松本には電気計器類、須坂には電話機、上諏訪には時計や光学器械」の精密機器工場が栄えたことから、長野県あるいは諏訪地域を「東洋のスイス」または「日本のスイス」と表現するようになった<sup>26</sup>。この言い回しは、90年代初頭のバブル期まで続いており<sup>27</sup>、社会科の教科書にも紹介されるほどだったが、2000年代にはもうすっかり過去のものとなった。なお姉妹都市関係というものは、町の風景や産業などに共通項をもったところと締結するのが常であるが、諏訪市と最初に結ばれたのはスイスではなかった。1960年、諏訪市が同時に二件提携したのは、オーストリア・チ

19 Ibid., p. 48.

20 辻政信『次の世界大戦—日本人の生きる道』河出書房, 1955年, pp. 7-8.

21 「天声人語」, 『朝日新聞』朝刊, 1950年4月21日, p. 1.

22 大坪徹心『こうすればよくなる—新しい日本の設計図』新紀元社, 1956年, pp. 130-143.

23 入江敏夫, 北野道彦編「日本のスイス・長野—新しい精密工業王国—」, 『新しい地理教室—日本のいとなみ2』筑摩書房, 1957年, pp. 260-261; 藤島俊「東洋のスイス諏訪市」, 『商業界=The journal of retailing 19(4)(212)』, 1966年, pp. 96-99; 宇山敬「連載・自動車郷土史(27)(長野県)—東洋のスイスへの道のりを進む」, 『自動車販売 11(2)1』日本自動車販売協会連合会, 1973年, pp. 64-67.

24 長野県文書広報課「長野県を“東洋のスイス”に」, 『都道府県展望(6)3』全国知事会, 1959年, pp. 40-46.

25 日本電産サンキョー・オルゴール記念館すわのね「ものづくりの町・諏訪—地域と共に歩む確かな技術」  
[https://suwanone.jp/suwa\\_musicbox/suwa](https://suwanone.jp/suwa_musicbox/suwa) (2021年1月18日閲覧)

26 入江敏夫, 北野道彦編, 前掲書, pp. 260-261.

27 宮坂正治「東洋のスイスとテクノハイランド信州」, 宝月圭吾編『長野県風土記』旺文社, 1986年, pp. 184-185; 「“東洋のスイス” 諏訪に来夏オープンの本格的リゾートゴルフ・コース『諏訪ゴルフ倶楽部』」, 『中部財界 28(13)(525)12』中部財界社, 1985年, pp. 76-79.



ロルの町ヴェアグル Wörgl とクントル Kundl だった<sup>28</sup>。チロルもまたスイスの牧歌的な山岳に似た風景や建築があるため、景観的イメージからとくに違和感はなかったといえるのだろう。

## 2. スイスやチロルと姉妹都市提携した長野県内の町にできた山小屋風のホテル・ペンション

ここで長野県のアルプスの景観によって、スイスあるいはチロルと姉妹都市関係となった町を時系列順に辿りながら、その町にできた主要な宿泊施設（ホテルやペンション）を中心に、スイス・シャレー風、山小屋風（チロル風、ハーフティンバー調など）にデザインされたものが、いづどこにどれほど建設されたのかを整理してゆく。このような建物群の増加によって、疑似的なスイス風の景観を形成させて発展した長野県の山岳観光の軌跡を一望してみたい。このような現象が、自国の伝統建築や景観を破壊したのか、またこのようなモノマネ建築だらけの景観も一種の文化現象としての日本風景史に組み込まれるのかは、時間の経過によって判断されてゆくだろう。

### 2-1. 諏訪地域：蓼科高原、白樺湖、原村など

前節で触れたように、長野県で最も早かったヨーロッパの山岳地との姉妹都市関係は諏訪市とチロルの二つの町であったが、諏訪地域は山岳景観と精密機器工業の発展から「日本のスイス」を標榜していた。山岳・湖畔リゾート地という観点から、スイス的な建物を意識したものが多いのは諏訪地域のなかでも茅野市であり、ここには蓼科高原、白樺湖、車山高原といったリゾート観光地が含まれている。

まず蓼科からみると、最も古い事例は別荘建築で、1905年築の旧・渡辺千秋邸（現・トヨタ蓼科記念館）である。この建物は、スイスやチロルなどで19世紀後半から20世紀初頭かけて流行したハイマートシュティール Heimatstil（郷土様式）に似たハーフティンバー建築である。元は諏訪藩主の渡辺千秋（1843-1921）の東京高輪にあった邸宅で、皇室からの仕事を多く受けていた建築家、木子幸三郎（1874-1941）が設計した。渡辺がのちに宮内大臣になった関係で木子に依頼したのだろう。諏訪地域が「日本のスイス」と呼ばれていた頃、トヨタ自動車の所有となり、1964年に蓼科湖近くの森の中に移築され解体の危機を免れた<sup>29</sup>。さらに蓼科湖付近では1975年、皇室のかつての別荘の土地に「チロル地方の山荘を模し、木をふんだんに」使用した「ホテル・ハイジ Hotel Heidi」が、元・皇族の東伏見昭氏によって開業した（図1）<sup>30</sup>。そのためここには今も「東伏見家別邸」と刻まれた皇族時代の門の石柱が残っている。建物のデザインと屋号の由来は、1974年に放映された人気TVアニメ『アルプスの少女ハイジ』の影響であるのは明らかだ。完全にリアルなスイス建築というわけではないものの、当時としてはかなり本格的なシャレー建築で、この本館の横にはハーフティンバー調の客室棟も併設された<sup>31</sup>。

ほぼ同じころ蓼科にはもう1件、シャレー建築のペンションが誕生している。三井不動産が1972年に長野県と第一号の自然保護協定を締結した翌年、蓼科高原での別荘地「三井の森」の分譲を開始しているが<sup>32</sup>、そのなかの一つ、男性ボーカルグループ「ダークダックス」のメンバーのひ

28 長野県「国際友好・姉妹提携等の状況（令和2年10月現在）」<https://www.pref.nagano.lg.jp/kokusai-kouryu/sangyo/kokusai-kouryu/kouryu/yuko/index.html>（2021年1月19日閲覧）以下すべての国際友好・姉妹提携のデータはこのウェブページを参照にした。

29 藤森照信『歴史遺産日本の洋館〈第1巻〉明治篇（1）』講談社、2002年、p.7.

30 設計は、小笠一級建築士事務所による。早川哲「くつろぎとゆとりをモットーとした牧歌調雰囲気：ホテルハイジ」、『月刊ホテル旅館 12(11)(143)』柴田書店、1975年、p.38



図1：蓼科高原の旧・東伏見家別邸の土地に建てられた「ホテル・ハイジ」  
(1975年、小埜一級建築士事務所設計) (2020年7月、筆者撮影)

とり佐々木行 (1932-2016) 氏が1980年前後ごろ開業したペンション「ADLIB (アドリブ)」がそれである。彼自身のスキー・登山と日曜大工の趣味が功を奏し、階段の手すりの飾りなどかなり精巧に、スイスあるいはチロル風につくられた<sup>33</sup>。また同じような時期にあたる1981年には、東急不動産が茅野市から借り受け開発中の「東急リゾートタウン蓼科」に、ハーフティンバー調の山小屋建築 (一部木造RC造) の「蓼科東急リゾート (現・蓼科東急ホテル)」が、東急チェーン初の本格リゾートホテルとして誕生している<sup>34</sup>。さらに蓼科高原には「ピラタスの丘」というスイスのルツェルン湖に面した高山ピラトゥス Pilatus の名を冠したペンション村があり、その中には「シャレー・グリンデル Chalet Grindel」や「モルゲンロート Morgenrot」などと一見スイス風かと思わせるような屋号のペンションもあるのだが、どちらももスイス風ともチロル風とも乖離した内外装で、唯一このペンション村近くにある「北八ヶ岳ロープウェイ (旧・日本ピラタス横岳ロープウェイ)」の山麓駅舎だけが、スイス・シャレーとハーフティンバー調の建物を組み合わせ、スイスの山小屋らしさ溢れる外観となっている。

蓼科から白樺湖に至る国道152号線沿いにも、何件か喫茶店などの小規模な建物がチロル風にデザインされているものが散見され、今は廃屋になっているものもあるが、白樺湖エリアにある現役の主なスイス風のホテルとして筆頭に挙げられるのは、1974年開業の東洋精糖グループによ

31 ホテルハイジは2018年に改装のため閉業し、2020年7月頃に再開のはずだったが、コロナ渦の影響が現在まだ工事中で、次は屋号を「HÔTEL de L'ALPAGE」と改め高級ホテルとして新規開業する。ホテルハイジの公式サイト <https://www.hotelheidi.co.jp/> (2020年5月20日閲覧、現在このサイトは閉鎖されている)；HÔTEL de L'ALPAGE (ホテル・ドゥ・ラルパージュ) の公式サイト <https://hotelalpage.com/> (2021年1月19日閲覧)

32 「三井の森が蓼科高原の開発に本腰一会議場や健康施設、森林文化のリゾートに。」、『日本経済新聞』長野県版、1984年7月24日、p. 3.

33 「ダークダックス遠山一(4)マンガさんのペンションー4人の個性が際立つ場所(こころの玉手箱)」、『日本経済新聞』夕刊、2019年12月5日、p. 12.

34 平山恵一「蓼科東急リゾート」、『月刊ホテル旅館 18(11)(214)』柴田書店、1981年、pp. 16-17；pp. 36-40.



図2：「白樺湖ビューホテル」（1974年、北野建設設計）のロビーラウンジの壁に掛かる鏡に細工された、マッターホルンとスイスの町並み風景が描かれたガラスレリーフ（2020年8月、筆者撮影）

る「白樺湖ビューホテル」だ<sup>35</sup>。立地もスイスの湖畔をイメージした白樺湖のほとりが選ばれ、ロビーラウンジの内装にはマッターホルンやスイスの山村の町並み、エーデルワイスなどのモチーフがガラスレリーフに細工された鏡や（図2）、スイスのカウベルが飾られ、大浴場の別棟はスイスのハイマートシュティール風の外観になっている。

白樺湖エリアでバブル期に開業したホテルでは、シャレー様式のプチホテル「モンテローザ Monte Rosa」（1994年以前に開業）や<sup>36</sup>、折衷的なシャレー風建築の保養施設「アルペンドルフ 白樺 Alpen Dorf Shirakaba」（1992年）があり、このホテルにはスイスの観光地名を使った3つの離れの山小屋風の客室棟（ツェルマット、ローザンヌ、サンモリッツ）もあり、本館の玄関部分とロビーの壁には大きいスイスのカウベル、吹き抜けロビーにもスイス土産の工芸品（スイス各州の名前が入ったそれぞれの紋章を描いたステンドガラスのプレート、アンリ・デュナンの肖像レリーフなど）が随所に飾られ、スイスをコンセプトにしていたことがよく伝わっている。バブル期に裕福だった日本人がスイス旅行に馴染み、憧れていた過去がここでは今も残像となっているのだ。

さらに白樺湖から観光道路「ビーナスライン Venus Line」で、白樺湖から女神湖へ行く途中にある「ペンション・ラクゥーン Pension Raccoon」は、かなりリアルなスイス・シャレーそっくりの建物となっている。一方白樺湖から国道152号線で繋がった車山高原には、バブル期に流行ったフランス風や英国風のハーフティンバー調で、スイスの様式とは全く異なるペンションも多いが、チロル風ハーフティンバーやスイス・シャレーを意識した宿泊施設も混在している。山小屋風ばかりとは限らず、「Guest House Bern」のようにスイス色が屋号のみに留まるものもある。

35 当時は「清風荘ホテル」であったが、現在は「伊東園ホテルズ」の傘下になっている。設計・施工は北野建設株式会社、インテリアは長野東急エージェンシー、インテリア施工は日航商事株式会社が請け負った。広告「白樺湖ビューホテル」、『読売新聞』朝刊、1974年6月4日、p.8。

36 2018年より中国資本の「ホテル白樺湖榮園」になった。

るが、「シャレー・ヒラヤマ」、「ヴィラ車山」、「ロッジくるま」は、ドイツ語圏の山間にありそのようなハーフティンバー調だ。「車山ハイランドホテル」(1967-71年<sup>37</sup>)と「車山観光ホテル」(昭和40年代、2017年閉業<sup>38</sup>)のように、創業年が古いもののほうが斬新なモダニズム建築の山小屋風となっている。車山高原のペンション村内で最もスイスの伝統的な木造シャレーに忠実なのは、バブル期に建った「リゾート・イン・ローザンヌ Resort Inn Lausanne」(1984年)である。

また白樺湖から近い姫木平のスキー場「エコーバレー Echo Valley」エリアでは、1983年、スイスのアンデルマツ村 Andermatt と独自に姉妹提携が結ばれている。姫木平にあるスキー学校とホテル「温泉山岳アンデルマツ」(1982年)の社長、高橋信昭氏らの働きかけによるもので<sup>39</sup>、このホテルの外観はスイス・シャレー風でも山小屋調でもないのだが、内部にはスイスから輸入したアンティーク家具が置かれ、スイス・フォンデュも供され、今も強くスイス風を意識している。さらにこのエリアのペンション村には、チロル風ハーフティンバー調の建物のペンション「アルペン・フローラ Alpen Flora」や、スイスの国旗を付けた「ペンション・ティンクル」もあり、いずれも山小屋風の外観になっている。

さらにハヶ岳山麓の原村も諏訪地域であるが、ここは日本初のペンション村として1974年に誕生し、1980年代に最盛期を迎えスイス・シャレー風のペンションも多い。二つのエリアに分かれており、「第1ペンションヴィレージ」にあるシャレー風建築のものは、飯塚ペンション<sup>40</sup>、石原ペンション<sup>41</sup>、さいとうペンション<sup>42</sup>、岩田ペンション<sup>43</sup>、ペンション SPOON OHSUMI<sup>44</sup>、そしてペンション村創設の1974年から今も続く「ハヶ岳ペンション」である<sup>45</sup>。「第2ペンションヴィレージ」にもシャレーのような山小屋風のペンション(ペンション・アルプ<sup>46</sup>、ペンションさくらそう<sup>47</sup>、ペンション・サルピア<sup>48</sup>、土居ペンション恵留夢<sup>49</sup>、ペンションふきのとう<sup>50</sup>、ペンション・メロディ<sup>51</sup>、ペンションわかつき<sup>52</sup>、ペンションわれもこう<sup>53</sup>)が数多くあったが、現在こ

37 車山ハイランドホテルの公式サイト「車山ハイランドについて」<https://highland-hotel.co.jp/about/> (2021年1月20日閲覧)

38 車山観光ホテル Blog「営業終了のお知らせ(平成29年3月31日)」<http://blog.livedoor.jp/kankouho/> (2021年1月20日閲覧)

39 温泉山岳ホテル・アンデルマツの公式サイト「姉妹提携の歴史」<https://www.anderstatt.co.jp/history/> (2021年1月20日閲覧)

40 2021年2月現在、飯塚ペンションの公式サイト(<http://www.lcv.ne.jp/iiduca/>)は開くことができるものの、コンテンツが機能していないので、閉業している可能性が高い。

41 現在も営業中。石原ペンションの公式サイト [http://www.lcv.ne.jp/ishihara/#\\_blank](http://www.lcv.ne.jp/ishihara/#_blank) (2021年2月3日閲覧)

42 チロル風の料理を提供していた。建物は現存しているが現在は閉業している。日本ペンション協会『講談社版 ペンションガイド』講談社、1982年、p. 179。

43 上掲書、p. 178。2021年2月現在、岩田ペンションの公式サイト(<https://www.iwata-pension.com/>)はアクセスできなくなっている。

44 上掲書、p. 183。

45 上掲書、p. 189。ハヶ岳ペンションの公式サイト [http://www.lcv.ne.jp/yatupen1/index.html#\\_blank](http://www.lcv.ne.jp/yatupen1/index.html#_blank) (2021年2月3日閲覧)

46 上掲書、p. 191。

47 上掲書、p. 210。

48 上掲書、p. 211。

49 第2ペンションヴィレージ内で、最もスイス・シャレーに近いデザインの建物だった。上掲書、p. 220。

50 上掲書、p. 233。



これらの営業は「われもこう」を除き確認できず、2020年発行の原村のペンション・マップを見ても<sup>54</sup>、80年代のときと同名のペンションは掲載されていない。

## 2-2. 野沢温泉村

諏訪市のときと同様に、次にヨーロッパの山岳地と締結された姉妹都市もスイスではなく奥チロルの町だった。野沢温泉村が1971年に姉妹都市提携を結んだのは、オーストリアのスキーの名手ハannes・シュナイダー Hannes Schneider (1890-1955) が働いていたスキーで有名な町で、彼の生まれ故郷にも近い村ザンクト・アントン・アム・アールベルク St. Anton am Arlberg である。野沢温泉村もスキーのメッカであり、ハannes・シュナイダーが1930年に来日したさい野沢温泉でスキーの指導を行ったことに因み<sup>55</sup>、野沢温泉には1976年に国内最大の「日本スキー博物館」も開館した。この建物はヨーロッパの教会のような意匠で<sup>56</sup>、立地もまるでチロルのような自然景観に囲まれ、バブル期に建設されたスイス・シャレーかチロルの民家のような外観の宿泊施設もここに数件集まっている。その屋号も1982年開業の「ロッジ・ハーネンカム Lodge Hahnenkamm」、ペンション「タンネンホーフ Tannenhof」や「シュネー Schnee」、ホテル「シュナイダー Schneider」などといったドイツ語名になっている。さらに野沢温泉村には「シュナイダー広場」もでき、その近くにも「ガストホーフ・シー・ハイル Gasthof Schi Heil」と「ハウス・サンアントン Haus St. Anton」というオーストリアのスキーに因んだ名称のホテルがあり、チロルの民家を意識した外装となっている。すでに1977年には、野沢温泉の中核的なホテルである「野沢温泉観光ホテル」(1950年創業)が改築され「野沢グランドホテル Nozawa Grand Hotel」と改名し<sup>57</sup>、半切妻屋根のチロルの伝統家屋を簡素化したようなデザインで生まれ変わっていた(図3)<sup>58</sup>。長野電鉄の直営チェーンホテルで、設計はヨーロッパ建築に造詣が深い石井建築事務所が担当した<sup>59</sup>。長野県内の山小屋風デザインのホテルで頻繁にみられるカウベルの展示も、この町では確認できず、かつてスキー客のマストな土産として興隆した、村の特産品である郷土玩具のアケビ細工「鳩車」の存在がそれを阻止しているのかもしれない。じっさい野沢グランドホテルでは、村内に3つしかない巨大な「鳩車」を所有しロビーに展示しており、浴衣や便せんなどの

51 上掲書, p. 237. 旧ペンション・メロディは、2009年よりアンティークショップに転用されている。http://www.tins-col.com/merody.html (2021年2月3日閲覧)

52 上掲書, p. 241.

53 上掲書, p. 242.

54 原村のオフィシャルサイト (<https://www.vill.hara.lg.jp/docs/1525.html>) にて、pdf ファイルで提供されている2020年12月発行の「信州八ヶ岳中央高原原村ロードマップ付きガイド」[https://www.vill.hara.lg.jp/fs/5/7/3/3/0/\\_/HP\\_\\_\\_\\_\\_.pdf](https://www.vill.hara.lg.jp/fs/5/7/3/3/0/_/HP_____.pdf) (2021年2月3日閲覧)

55 日本スキー博物館『日本スキー博物館20周年記念誌』はおずき書籍, 1997年, pp. 31-34.

56 2020年7月、日本スキー博物館でのヒアリング調査の際その理由を尋ねたところ、ヨーロッパの教会のような安曇野市の碓山美術館(1958年築、今井兼次設計)の影響であるという。

57 野沢グランドホテルのオフィシャルサイト中の歴史年表 <http://www.nozawagrand.com/ayumi.html> (2021年1月19日閲覧)

58 2020年7月に野沢グランドホテルで聞き取り調査をしたところ、ホテル側としてはチロル風にすることを必須条件には考えてなかったという回答を得たが、おそらく施主(ホテル)からのリクエストがなくても設計者側の発案で、チロルを思わせる野沢温泉の山岳景観との調和や姉妹都市の関係に合わせてチロル風デザインの建物となった可能性が高い。

59 高橋栄一「野沢グランドホテル」、『月刊ホテル旅館 15(3)(171)』柴田書店, 1978年, p. 18; pp. 26-29.



図3：野沢温泉の「野沢グランドホテル」（1977年、石井建築事務所設計）（2020年8月、筆者撮影）

デザインにも「鳩車」のモチーフを使っているので、カウベルを置いたら似合わない。野沢温泉の場合、スイス風にやや近いのは日本スキー博物館周辺のスキー場エリアのみで、やはりスイスよりハンネス・シュナイダーゆかりのチロルを意識した雰囲気が優勢だったといえる。

### 2-3. 安曇村（現・松本市）：上高地と乗鞍高原

札幌冬季オリンピックが開催された1972年、ついに長野県とスイスとの姉妹関係が誕生した。上高地や乗鞍高原を含む安曇村（2005年より松本市となる）が、グリンデルヴァルト Grindelwald 村（ベルン州）と姉妹村提携をしたのだ。槍ヶ岳や穂高連峰の登山の起点地である上高地では、毎年4月27日の山開き「開山祭」のさい、スイスの民俗衣装を着たアルプホルン奏者の演奏が披露されるのはその賜物だ。すでに上高地とスイスのイメージを結びつけていた事例は、1933年開業の「上高地ホテル（現・上高地帝国ホテル）」にもみられる。スイスの山小屋をモデルに建物がデザインされたと当時の史料は裏付けているのだが<sup>60</sup>、実際にはスイスに似たような建物は存在しない。しかしそれは大した問題ではない。たとえばアイルランドにできた初期のスイス・コテージ（Cahir やダブリン郊外 Santry のいずれも18世紀後半のもの）は、さらにスイスの山小屋とは似ても似つかないものであったので、国境を越えるさい著しく変化してしまう現象は古今東西よくあることだ。現在の上高地帝国ホテルは、1977年に当時の高橋貞太郎（1892-1970）の設計プランを復元・再建したものである。スイス的な意匠は、吹き抜けロビーの木製透かし装飾のバルコニーの手摺ぐらいいで、19世紀ブリエンツ地方の大きなカウベルも飾られている（図4）。また、レストランやラウンジ名には、現在アルペンローゼやグリンデルワルトといったスイスに因んだ命名がなされているところに、スイスへのこだわりは垣間見える。

1954年に建った安曇村の初代村営ホテル「清山荘」も、2代目の建物（1971年に「安曇村営ホテル」と改称）にもスイスらしい意匠は全くみられない。スイス風を改めて意識し始めたのは、やはりグリンデルヴァルトとの姉妹村提携以降で、とくにバブル期に盛んだった。1989-92年、

60 砂本文彦『近代日本の国際リゾートー1930年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社、2008年、pp.135-136。



図4：「上高地帝国ホテル」（1977年、高橋貞太郎設計）のロビーラウンジ「グリンデルワルト」では、壁にスイスのカウベル、吹き抜け2階部分にスイス風の木製手すりがある（2020年7月、筆者撮影）

安曇村では政府の「ふるさと創生事業」に資金を上乗せして「アルプスの郷（さと）づくり事業」が展開されたさい、スイス風の景観整備を行うようになり<sup>61</sup>、バス停15か所や公衆便所が山小屋の意匠で統一された<sup>62</sup>。このような安曇村のスイス風の景観整備を経て、1993年に竹中工務店によってRPC造で新築された村営ホテルは、山小屋風の外観にロビーは吹き抜け、中央にお決まりのマントルピースを設置するというプロトタイプでデザインされ、1994年、現名称「上高地アルペンホテル」として新規開業した。現在、フロントにはグリンデルヴァルト村から安曇村に寄贈された大きなカウベルが飾られている<sup>63</sup>。

公共建築もまたスイス風の意匠が採用されるようになった。やはりグリンデルヴァルトとの姉妹村提携後、1978年に新築された島々にある村役場庁舎（現・松本市役所安曇支所）はスイスの古民家建築をモチーフにした半切妻屋根の外観だ。1979年改築竣工の村営「徳沢ロッジ」と、1983年築の自然公園の管理棟「上高地美化センター」はシャレー建築で<sup>64</sup>、野麦街道（国道158号）沿いの稲核にある、1998年より整備された生産物直売所（現・道の駅）「風穴の里」では、スイスにある教会の鐘楼の鋭角屋根のデザインも取り入れられている<sup>65</sup>。一方2002年竣工の「上高地インフォメーションセンター」についてはスイス色は薄く、上高地らしい和と洋が融合したハーフティンバーの意匠も含む山小屋風建築となっているので<sup>66</sup>、極端にスイス風の建物というのはバブル期にピークを迎え、その後衰退の一途を辿っているようだ。

1956年のコルティーナ・ダンペッツォの冬季オリンピックで銀メダルを勝ち取った猪谷千春（1931-）が、スキーの練習をしていた場所として知られる乗鞍高原も旧・安曇村で、ここにも

61 安曇村誌編纂委員会『安曇村誌第三巻歴史下』ぎょうせい、1998年、pp. 29-30.

62 上掲書、p. 167.

63 2020年7月に行った上高地アルペンホテルでの聞き取り調査による。

64 安曇村誌編纂委員会、前掲書、p. 636.

65 上掲書、pp. 35-37.

66 みずゞ設計の公式サイト「上高地インフォメーションセンター」<https://misuzusekkei.com>（2021年1月20日閲覧）



図5：「スイス風」ではない「スイスそのもの」のシャレー建築で建てられた乗鞍高原の「ホテル・ガルニ・ローリーホフ」(1987年)(2020年7月、筆者撮影)

沢山のスイス風の宿泊施設や公共建築ができた。乗鞍高原では、まずスイス・シャレー風の「ペンション・グリンデルワルト Pension Grindelwald」(1975年)、「ペンションのりくら」(1978年)、「ツィンマー・ベルグハウス Zimmer Berghaus」(1985年)が建った。1987年にはさらに精巧なスイス・シャレーそのものの外観を呈する「ホテル・ガルニ・ローリーホフ Hotel Garni Roli-Hof」が、プロスキーヤー奥原達(いたる)氏によって開業されている(図5)。奥原達氏は、上高地の老舗山荘「西糸屋」の現在3代目の山荘主で登山家の奥原幸(つかさ)氏の弟(つまり奥原達氏は西糸屋の2代目奥原教永のご子息)であり、ローリーホフは西糸屋の姉妹館でもあるのだ<sup>67</sup>。ローリーホフの玄関先には1979年と書かれたスイスのカウベルが飾られているが、それはこの本格的シャレー建築の助言等も行ったスイスのマイリンゲン Meiringen 出身の友人ローランド・フォンタニーヴェ Roland Fontanive 氏から贈られたもので、屋号のローリーはローランド氏の愛称に由来している<sup>68</sup>。離れの温泉風呂用の小さな棟もシャレー建築となっていて、これは開業の2年後に増築された。館内の至るところにはスイスの伝統工芸品が飾られ、とくに食堂の壁には沢山の絵皿陶器が飾られている。木製の椅子はスイスから取り寄せたもので、ローリーホフで供されるスイス料理は、スイスの老舗ホテル・ローゼンラウイ Hotel Rosenloui を所有・経営するケルリ Kehrli 家直伝のものである。

また乗鞍高原にはチロル風ハーフティンバー調の建物(たとえば「ペンション・カムス」や「乗鞍岳畳平バスターミナル」など)も混在しているが、猪谷父子の名を冠したキャンプ場「いがやレクリエーションランド」は、1990年に安曇村が推進していた「スイスの森整備事業」の一環で、

67 西糸屋は、1923年に奥原英男が創業した登山家・キャンパー向けの売店に、1928年に2階建ての宿泊棟を増設したことに遡る上高地を代表する山荘である。上高地西糸屋山荘のオフィシャルサイト「山荘の概要」<https://www.nishiitoya.com/overview-2/> (2021年1月25日閲覧)

68 ホテル・ガルニ(部屋と朝食のみの宿泊形態)は、ペンション・コンサルティング会社 PSD(ペンション・システム・デヴェロップメント)の小杉恵(けい)氏の監修による。以下ローリーホフに関する情報はすべて、2020年7月に行われた聞き取り調査による。インタビューに応じてくださった奥原美加子さんには心より御礼を申し上げる。



レストランや管理棟などにスイス・シャレー風のデザインが採用された。「スイスの森」には「スイスソーセージ工場」まで造られ<sup>69</sup>、現在ランド内の3棟はアイガー、メンヒ、シヨンと、スイスの山や城・地名で呼ばれている。

#### 2-4. 山ノ内町：志賀高原

日本有数のスキー場が集まる志賀高原を含む山ノ内町は、スイスと姉妹都市提携をしなかった。1928年、大倉喜八郎（1837-1928）の招待によって来日したノルウェーのスキー連盟副会長オラフ・ヘルセット Olaf Helset（1892-1960）陸軍中尉は、志賀高原を「東洋のサンモリッツ」と評したものの<sup>70</sup>、世界屈指の高級スキーリゾートのサンモリッツが姉妹関係を結んだのは、上質なスキーの雪質で知られる北海道倶知安町で、すでに1964年のことだった。山ノ内町が1973年に締結したのは、アメリカ合衆国アイダホ州のスキーリゾートのサンヴァレー市 Sun Valley だ。ただし、サンヴァレーもスイス風の町並みが形成されており、有名なものでは1937年にできたスイスの村をモデルにした「Challenger Inn」というピクチャレスクな宿泊施設エリアがある。志賀高原では1955年に開場した「法坂スキー場」が「サンバレースキー場」と改名され、ここのリフト乗り場の建物もキッチュなスイス風だ（図6）。この周りに集結している1970年代に建ったホテル群：「あやめホテル<sup>71</sup>」（1970年<sup>72</sup>、2010年ごろ廃業）、「ビワ池ホテル」（1961年改名、シャレー風の建物は1972年築<sup>73</sup>）、「志賀の湯ホテル<sup>74</sup>」（1975年<sup>75</sup>）、「サンライズ法坂」（1993年<sup>76</sup>、2007年廃業、2020年解体）、「ヴィラ・アルペン Villa Alpen」（築年不明<sup>77</sup>）は、いずれもシャレー風の外観となっているが、その屋号からも想像できるように客室のほとんどが和室である。サンバレースキー場の衰退とともに、山ノ内町とサンヴァレー市との姉妹都市提携は2007年に解消され、その後山ノ内町は2018年に米コロラド州のスキーリゾート、ヴェイル Vail 市と姉妹都市となった。ここもまたスイス風の建物が多い町並みが形成されたところで、とにかく志賀高原ではあらゆるエリアにて、スイス・シャレーを意識した外観をもつ宿泊施設が多いことも共通している。

なによりも日本各地の山岳リゾートの地名で頻出する「高原」を語尾に付けた最初の事例は、ここ志賀高原で、1929年に平穏村を長野電鉄の社長神津藤平（1872-1960）が「志賀高原」と呼んだことに始まった<sup>78</sup>。この志賀高原で最初のスイス風建築のホテルは、1937年に清水組（現・

69 安曇村誌編纂委員会、前掲書、pp. 159-160；pp. 656-657。

70 志賀高原でヘルセットを案内したスキーヤー麻生武治（1899-1993）の回想録による。山村順次『志賀高原観光開発史』徳川林政史研究所、1975年、pp. 48-49；志賀高原旅館組合『志賀高原旅館組合誌：明治・大正～昭和～平成9年』志賀高原旅館組合、1998年、pp. 47-48；清水聡子「山岳リゾート再考」、『松本大学研究紀要第12号』2014年、p. 161。

71 1958年創業時の名は、目の前のアヤメの群生に因み「あやめ荘」となった。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 234。

72 改築は1987年。トクー！（ToCool!）<https://www.tocoo.jp/detail/593>（2021年1月21日閲覧）

73 1937年創業時の名は「ビワ池ヒュッテ」で、近くにある志賀高原ホテルの建設で余った建築資材の材木が使用されていた。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 234。

74 1956年創業時の名は「法坂ヒュッテ」（のち「法坂旅館」）。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 235。

75 るるぶトラベル <https://www.rurubu.travel/hotel/japan/nagano/shiga-no-yu-hotel?cid=1839184>（2021年2月3日閲覧）

76 前身は、1956年、ジャイアントスキー場エリアに開業した「まるや荘」（のちに「志賀ホテルまるや」）で、1993年にサンバレーの「志賀セントラルホテル」跡に移転した。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 236。

77 1956年開業のスキー学校付属「アルペン山荘」に遡る。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 89；p. 235。



図6：志賀高原の「サンバレースキー場」にある教会風のリフト乗り場とシャレー風のホテル群（左から「あやめホテル」、「志賀の湯ホテル」、さらにその右横には2棟のシャレー建築のホテル「サンライズ法坂」もあったが、すでに解体され更地になっていた）（2020年7月、筆者撮影）

清水建設）が施工し、ドイツ人の指導の元に設計された、日本初の外国人スキーヤー向けの「志賀高原ホテル」（現・志賀高原歴史記念館）である。スイスの山小屋をモデルにデザインされたという当時の証言が残っているが<sup>79</sup>、上高地ホテルの場合と同様、じっさいはスイス風と呼ぶにはほど遠い意匠で、3階の窓のステンドグラスにはヴェネツィアの象徴サン・マルコの獅子も描かれ、内装には白樺の丸太を額縁にした花鳥風月を描いた沢宏鞠や丸山春霞筆、西山翠嶂の日本画もふんだんに飾られる一方、木や岩石を多用した内装は、国籍不明ではあるものの山小屋らしさは演出されている。ホテル専用のグレンデとリフトがあり、建物の前にある池ではボート遊びもできた。1963年、本館と同じような外観の新館が、竹中工務店の施工で増築されたが<sup>80</sup>、1999年に廃業し、正面右半分の棟が解体されファサードのシンメトリー性が失われ今に至っている。

高度経済成長期の1960年代は日本各地でレジャーブームが巻き起こり、志賀高原にもホテルが増え始めた。そんななか1969年に、建築家の平島二郎（1929-1998）によって設計された「奥志賀高原ホテル」が「奥志賀高原スキー場」前に開業した<sup>81</sup>。長野電鉄が経営する「北欧風デザイン」の純洋式ホテルで、客室の壁には木の板を貼り<sup>82</sup>、ラウンジ中央にはマントルピースが備えられ、意匠は山小屋からインスパイアされているものの、気鋭のモダニズム建築であり、内外装ともにスイスらしさは微塵も感じられない。しかし現在内部には、バブル期の購入と推定されるスイス土産の工芸陶器皿やカウベルが公共スペースの壁に沢山飾られている。奥志賀高原ホテルは後述

78 平島二郎「奥志賀高原ホテル設計へのアプローチ」、『月刊ホテル旅館9（8）（104）』柴田書店、1972年、p.66；宮坂克彦編『信州人物風土記・近代を拓く 第十二巻 観光信州・信念の先覚者／神津藤平』銀河書房、1989年、p.72。

79 砂本、前掲書、p.210。

80 多賀谷義雄「白樺に囲まれた山のホテルー信州・志賀高原ホテル」、『月刊ホテル旅館2（1）』柴田書店、1965年、pp.61-65。

81 平島二郎「奥志賀高原ホテル」、『建築文化 26（294）4』彰国社、1971年、pp.145-150。

82 斎藤武「奥志賀高原ホテル〈奥志賀〉」、『月刊ホテル旅館7（3）』柴田書店、1970年、pp.9-15。

するホテル「グランフェニックス奥志賀」が開業するまでは、皇室が利用するほどの志賀高原で最も高級なホテルだった。

志賀高原でスイス・シャレーのような外観の宿泊施設が急増する契機となったのは、1972年の札幌冬季オリンピックで、開業ラッシュが起こったのはその前後である。まず国民宿舎の「志賀高原荘」がシャレー風意匠の RC 造で1966年に建設された<sup>83</sup>。1960年開場の「高天ヶ原マンモススキー場」エリアでは、山小屋風の「ホテル銀嶺（旧・志賀銀嶺荘<sup>84</sup>）」（1969年<sup>85</sup>）、「ホテル・タキモト」（1981年<sup>86</sup>、1999年改築<sup>87</sup>）、シャレー風の「高天ヶ原ホテル」（築年不明<sup>88</sup>）ができた。とくに1963年開場の「一の瀬ダイヤモンドスキー場」の周辺エリアには、60年代以降数多くのスイス・シャレー風の外観を呈するホテルが集中して建ち並んだ。とくに1964年に開業したものが多く、1964年に開催された東京オリンピックの影響が如実に反映されている。「志賀ホワイトホテル Shiga White Hotel」（1963年<sup>89</sup>）にはじまり、「ホテルこだま」（1964年<sup>90</sup>）、「ホテル金平」（築年不明<sup>91</sup>）、「ヴィラーの瀬 Villa Ichinose」（1964年<sup>92</sup>）、「ホテル大六」（1964年<sup>93</sup>）、「ホテル・アララギ」（1969年<sup>94</sup>）、「シャレー志賀 Chalet Shiga」（1969年<sup>95</sup>）、「志賀スカイランドホテル Shiga Skyland Hotel」（本館1970年<sup>96</sup>、別館1971年<sup>97</sup>）、「ホテルサンルート志賀高原 Hotel Sunroute Shiga Kogen」（1976年と1993年に改築<sup>98</sup>、2012年閉業）、「ホテル一乃瀬」（1971年<sup>99</sup>）、「ホテル玉峰」（1971年<sup>100</sup>、2015年廃業<sup>101</sup>）、「ホテルサンモリッツ志賀 Hotel St. Moritz Shiga」（1973年<sup>102</sup>）、「ホテルジャパン志賀 Hotel Japan Shiga<sup>103</sup>」（かもしか館は1973年、らいちょう館は1978年<sup>104</sup>）、「志賀一の

83 志賀高原旅館組合、前掲書、p. 237.

84 ホテル銀嶺のオフィシャルサイト <http://www.ginrei.co.jp/info.htm>（2021年1月21日閲覧）

85 志賀高原旅館組合、前掲書、p. 268.

86 その前身は1965年に開業した渋温泉の多喜本旅館の山荘（のち「第一多喜本」と改名）である。1981年に改築したさいに RPC 造 4 階のシャレー風建築になり、現在の屋号に改名した。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 125；p. 267.

87 d トラベル [https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5137\\_A02/detail/](https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5137_A02/detail/)（2021年1月21日閲覧）

88 予約サイト「やど日本 <http://www.ryokan.or.jp/inn/93486>（2021年1月21日閲覧）」によれば、高天ヶ原ホテルの創業は1953年とあるが、現在のシャレー風の建物は明らかに1950年代のものではない。

89 1964年創業時の名前は「西山山荘ホテル一乃瀬」だった。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 118.

90 志賀高原旅館組合、前掲書、p. 269.

91 創業は1964年の「金平旅館」に遡る。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 118；p. 270.

92 上掲書、p. 118；p. 271.

93 創業時の名前は「大六山荘」だった。上掲書、p. 118；p. 273.

94 前身は、1967年開業の「あらゝぎ荘」である。上掲書、p. 134.

95 上掲書、p. 138；p. 275.

96 上掲書、p. 141；p. 277.

97 両方の館がシャレー風建築で、改築は本館が1980年、別館が1989年。d トラベル [https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5138\\_A01/detail/](https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5138_A01/detail/)（2021年1月21日閲覧）

98 1971年創業時の名は「志賀サンホテル」だった。1976年に改築し現在の名前に改名した。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 143；p. 278.

99 1963年創業時の名前は「志賀ホワイトヒュッテ」だった。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 116；p. 268.

100 上掲書、p. 143；p. 278.

101 週間ホテルレストラン HOTERES Online「長野のホテル玉峰が事業停止し破産手続、負債総額約2.2億円」（2015年6月1日配信）<http://www.hoteresonline.com/articles/342>（2021年2月3日閲覧）

102 志賀高原旅館組合、前掲書、p. 148；p. 280.

103 1964年創業時の名前は「ロッヂジャパン志賀」だった。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 118.

瀬荘」(1973年<sup>105</sup>、2017年廃業)、「ダイヤモンド志賀 Diamond Shiga<sup>106</sup>」(煉瓦館は1975年、白亜館は1978年<sup>107</sup>)、「ホテル・ホウルス志賀高原 Hotel Khuls Shigakogen」(1977年<sup>108</sup>)がその例だ。なかでも「シャレー志賀」は、日本の山岳地のホテルの屋号に「シャレー」を使用した非常に早い事例として特筆すべきで、これは創業者の佐藤喜惣治が、1960年にスイス旅行をしたさいにスイスの山小屋のシャレー建築に感銘を受けたことによる<sup>109</sup>。このように70年代の志賀高原では、かなりの数のシャレー風の外観のホテルが開業したものの、客室のほとんどは今でも畳の和室のままである。

その他のエリアでは、蓮池近くの「ホテルニュー志賀」(1972年以前<sup>110</sup>)、熊の湯温泉の「志賀パレスホテル」(1970年<sup>111</sup>)と「志賀高原ロッジ」(1976年<sup>112</sup>)、木戸池温泉(石の湯)の「石の湯ロッジ」(築年不明<sup>113</sup>)と「石の湯ホテル」(1976年<sup>114</sup>)、発哺温泉の「志賀スイスイン Shiga Swiss Inn<sup>115</sup>」のサンモリッツ館(1970年<sup>116</sup>)、1961年開場の「竜王スキー場(現・竜王スキーパーク)」にある「フォーシーズンホテル・ノース志賀」(1975年創業)の南館(1982年<sup>117</sup>)と「ホテル・ホワイトイン北志賀」(1977年、1993年新築)がスイス・シャレー風の外観を呈している。その近くにある「ホテル・アルパイン Hotel Alpine」(1985年)はシャレーではないがアルプス山麓の町にありそうな建物となっており、このエリアのホテルは80-90年代に改築されているので洋室も多い。なお、志賀高原で最も早く1930年に開業した「ジャイアントスキー場」エリアでも、「ホテル・イタクラ」(築年不明<sup>118</sup>)、「ホテル・アルペンブルク Hotel Alpen Burg」(1990年)、「ホ

104 dトラベル <https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5138008/detail/> (2021年1月21日閲覧)

105 志賀高原旅館組合, 前掲書, p. 148; p. 280.

106 1970年創業時の名前は「ダイヤモンドホテル」だった。志賀高原旅館組合, 前掲書, p. 141; p. 277.

107 いずれも改築は1989年。dトラベル <https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5138005/detail/> (2021年1月21日閲覧)

108 1965年創業の「志賀スキーロッジ」を新築改名した。ホテル・ホウルス志賀高原のオフィシャルサイト <http://www.khuls.com/> (2021年1月21日閲覧)

109 高原旅館組合, 前掲書, p. 275. 現在使用されているシャレー志賀のロゴは、ドイツの亀の子文字(フラクトゥア)が使用され、エーデルワイスの絵があしらわれている。シャレー志賀のオフィシャルサイト <https://chalet-shiga.com/> (2021年2月3日閲覧)

110 「ホテルニュー志賀を訪ねて」、『実業往来(243)』実業往来社, 1972年, p. 114.

111 るるぶトラベル <https://www.rurubu.travel/hotel/japan/nagano/shiga-palace-hotel?cid=1839115> (2021年1月21日閲覧)

112 1938年に志賀高原にも開設された国鉄(現・JR)の宿泊施設「山の家」(当時は木造2階建て)に遡る。1976年にRC造で新築したが山小屋風のデザインとなっていて、70年代に特徴的なモザイク壁画が今もロビーに残っている。

113 文人画家、辻まこと(1913-1975)所縁の1957年創業時の斬新なデザインの山小屋風建築は焼失しており、現在の建物は再建後のもの。石の湯ロッジのオフィシャルサイト「創業60周年企画」[https://ishinoyu.com/event/60\\_anniv](https://ishinoyu.com/event/60_anniv) (2021年2月3日閲覧)

114 志賀高原旅館組合, 前掲書, p. 247.

115 その前身は、1963年開業の「松屋山荘ロッジニュー発哺」(のち「スイスインニュー発哺」と改名)である。志賀高原旅館組合, 前掲書, p. 115; p. 265.

116 ホテル「志賀スイスイン」には、シャレー様式でない新館のダボス館(1985年)もあるが、いずれも1992年に改築されている。dトラベル <https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5136005/detail/> (2021年1月21日閲覧)

117 東館の築年は1991年。dトラベル <https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/5128001/detail/> (2021年1月21日閲覧)





図7：スイス・シャレーをモデルにデザインされた奥志賀高原のホテル「グランフェニックス奥志賀」(1994年) (2020年7月、著者撮影)

テル・ベルグ Hotel Berg<sup>119</sup>」(1993年にシャレー風に改築・改名<sup>120</sup>)といったスイス・シャレーの外観を持つホテルが集まっている。なお、ホテル・アルペンブルクは1956年創業の「ジャイアントヒュッテ」に遡るが、1990年にチロルの伝統的なシャレー風に改築して現在の屋号に改名したさい、内装にはチロル家具を使用し、施工にもチロルから職人を呼び寄せたという徹底ぶりだ<sup>121</sup>。

多くのホテルがバブル期に改築され、スイス風あるいはチロル風シャレーの様相がさらに強化されていったが、バブル真っ盛りの1987年、チロル風をコンセプトとしたシャレー建築のペンション「シャレークリスチャニア Chalet Christiania」が奥志賀高原にも開業した<sup>122</sup>。その一方1994年、奥志賀高原に建ったホテル「グランフェニックス奥志賀 Grand Phenix Okushiga」は本格的なスイス・シャレー建築となっている(図7)。スポーツウェアの会社「フェニックス」の社長田島和彦氏によって創業され、彼は1962-67年にシャレー建築が豊富で牧歌的なグラウビュンデン州の町クロスタース Klosters に住んでいたため、スイスのシャレー式ホテルには精通していた。スポーツウェアと同じように流行に左右されないホテルを目指そうと、「スイスのホテルによくあるシャレーのイメージ」で造ったが、窓が小さい伝統的なシャレーのデザインはあえて踏襲せず、奥志賀の風景を堪能できるよう窓を大きくしたという<sup>123</sup>。建築資材や家具調度品はオーストリア、カナダ、イタリアなど10か国から輸入し、職人も現地から呼び寄せた<sup>124</sup>。外装の木製バルコニーの手すり、装飾的な透かし模様をつなぐ木製パネルがあり、そこにはリスや山羊、

118 ホテル・イタクラは、創業1956年の「板倉茶屋」に遡り、のち「板倉ヒュッテ・乙女の湯」という改名を経て現在の屋号となったが、現在のシャレー風の建物は明らかに1950年代のものではない。志賀高原旅館組合、前掲書、p. 256。

119 1967年の開業時の名前は「ロッジベルグ」だった。志賀高旅館組合、前掲書、p. 134；p. 182。

120 上掲書、p. 182；p. 258。

121 志賀高原旅館組合、前掲書、p. 256。

122 上掲書、p. 171；p. 283。

鹿などのアルプスの動物レリーフの木彫が施されている。このホテルでも玄関ロビーには、大きなスイス製のカウベルが飾られている。今までみてきたなかでは野沢温泉を除き、白樺湖、上高地、乗鞍、志賀高原の、ほとんどの主要なシャレー・山小屋風デザインのホテルの玄関ロビーで、スイスのカウベルの展示が行われていて、この奇妙な偏愛現象は、もはや姉妹都市関係の域を超えかなり広く普及していた。

(つづく)

### 【謝辞】

本研究は、2020年度跡見学園後援会助成金による特別研究助成を受けて実施された研究発表の一部である。ここに記して心より謝意を表します。

### 参考文献

- Fujioka, Nobuko, *Vision or Creation? Kojima Usui and the Literary Landscape of the Japanese Alps*, in *Comparative Literature Studies*, vol. 39, no. 4, East-West Issue, 2002, pp. 282-292.
- Satow, Ernest Mason and Hawes, A. G. S., *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*, Kelley & Co., Yokohama, 1881.
- Weston, Walter, *The Playground of the Far East*, John Murray, London, 1918.
- Weston, Walter, *Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*, John Murray, London, 1896.
- 安曇村誌編纂委員会『安曇村誌第三巻歴史下』ぎょうせい, 1998年.
- 伊藤銀月「日本の瑞西と日本のベニス」,『日本風景新論』前川文栄閣, 1910年, pp.139-141.
- 入江敏夫, 北野道彦編『新しい地理教室—日本のいとなみ2』筑摩書房, 1957年.
- 宇山敬「連載・自動車郷土史(27)(長野県) —東洋のスイスへの道のりを進む」,『自動車販売 11(2)1』日本自動車販売協会連合会, 1973年, pp.64-67.
- 大坪徹心『こうすればよくなる—新しい日本の設計図』新紀元社, 1956年.
- ウォルター・ウェストン(岡村精一訳)『日本アルプス—登山と探検』(平凡社ライブラリー94), 平凡社, 1995年.
- ウォルター・ウェストン(水野勉訳)『日本アルプス再訪』(平凡社ライブラリー161), 平凡社, 1996年.
- 河村英和『観光大国スイスの誕生—「辺境」から「崇高なる美」の国へ』(平凡社新書692), 平凡社, 2013年.
- 広告「白樺湖ビューホテル」,『読売新聞』朝刊, 1974年6月4日, p.8.

123 「象徴的なのがラウンジの大窓だ。6mの高さがある一枚ガラスの窓からは、庭の木々の向こうに奥志賀の山々が見渡せる。(中略) 客室は腰窓だが、左右は極力部屋の幅いっぱい、上は天井までとり、下部の壁の高さは90cmまでにとどめている。それ以上になると圧迫感が出るからだ。窓はサッシではない。木製だが気密性の高いものをヨーロッパに注文して取り寄せた。(中略) 構造自体は鉄筋コンクリートだが、内装には天然石と天然木をふんだんに使っている。木の質感は、なにより人をほっとさせる力をもつ。材はフィンランド松だが、一国からだけでは調達しきれないので、いくつかの国から輸入することになった。石材は、御影石。表面は磨かずに、壁などはあえてノミ跡を残したような仕上げにしている」。ホテルグランフェニックス奥志賀ができるまで『田島和彦自伝』「37.夢を託したホテル、グランフェニックス」  
<https://www.hotelgrandphenix.co.jp/autobiography/037.html> (2021年1月21日閲覧)

124 早川哲「ホテルグランフェニックス奥志賀」,『月刊ホテル旅館 32(3)(375)』柴田書店,1995年,p.39

砂本文彦『近代日本の国際リゾートー1930年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社、2008年。

斎藤武「奥志賀高原ホテル〈奥志賀〉」、『月刊ホテル旅館 7(3)』柴田書店、1970年、pp.9-15。

志賀高原旅館組合『志賀高原旅館組合誌：明治・大正～昭和～平成9年』志賀高原旅館組合、1998年。

志賀重昂「日本のラインと日本の瑞西」、『世界の奇観』、『志賀重昂全集第5巻』志賀重昂全集刊行会、1928年、pp.388-389。

清水聡子「山岳リゾート再考」、『松本大学研究紀要第12号』2014年、p.161。

高頭敏之助「日本の瑞西檜原村」、『地理教材研究会』、『地理教材研究第12輯』目黒書店、1928年、pp.189-194。

高橋栄一「野沢グランドホテル」、『月刊ホテル旅館 15(3)(171)』柴田書店、1978年、p.18；pp.26-29。

多賀谷義雄「白樺に囲まれた山のホテルー信州・志賀高原ホテル」、『月刊ホテル旅館 2(1)』柴田書店、1965年、pp.61-65。

「ダークダックス遠山一(4)マンガさんのペンションー4人の個性が際立つ場所(こころの玉手箱)」、『日本経済新聞』夕刊、2019年12月5日、p.12。

辻政信『次の世界大戦ー日本人の生きる道』河出書房、1955年。

「天声人語」、『朝日新聞』朝刊、1950年4月21日、p.1。

「“東洋のスイス” 諏訪に来夏オープンの一格的リゾートゴルフ・コース『諏訪ゴルフ倶楽部』」、『中部財界 28(13)(525)12』中部財界社、1985年、pp.76-79。

長野県文書広報課「長野県を“東洋のスイス”に」、『都道府県展覧(6)3』全国知事会、1959年、pp.40-46。

日本スキー博物館『日本スキー博物館20周年記念誌』ほおずき書籍、1997年。

日本ペンション協会『講談社版 ペンションガイド』講談社、1982年。

早川哲「くつろぎとゆとりをモットーとした牧歌調雰囲気：ホテルハイジ」、『月刊ホテル旅館 12(11)(143)』柴田書店、1975年、pp.38-41。

早川哲「ホテルグランフェニックス奥志賀」、『月刊ホテル旅館 32(3)(375)』柴田書店、1995年、pp.37-40。

藤島俊「東洋のスイス諏訪市」、『商業界=The journal of retailing 19(4)(212)』、1966年、pp.96-99。

藤森照信『歴史遺産日本の洋館〈第1巻〉明治篇(1)』講談社、2002年。

平山恵一「蓼科東急リゾート」、『月刊ホテル旅館 18(11)(214)』柴田書店、1981年、pp.16-17；pp.36-40。

平島二郎「奥志賀高原ホテル」、『建築文化 26(294)4』彰国社、1971年、pp.145-150。

平島二郎「奥志賀高原ホテル設計へのアプローチ」、『月刊ホテル旅館 9(8)(104)』柴田書店、1972年、pp.65-71。

「ホテルニュー志賀を訪ねて」、『実業往来(243)』実業往来社、1972年、p.114。

「三井の森が蓼科高原の開発に本腰ー会議場や健康施設、森林文化のリゾートに。」、『日本経済新聞』長野県版、1984年7月24日、p.3。

宮坂克彦編『信州人物風土記・近代を拓く 第十二巻 観光信州・信念の先覚者／神津藤平』銀河書房、1989年。

宮坂正治「東洋のスイスとテクノハイランド信州」、『宝月圭吾編』『長野県風土記』旺文社、1986年、pp.184-185。

山村順次『志賀高原観光開発史』徳川林政史研究所、1975年。

脇水鐵五郎「甲信は日本の瑞西なり」、『庭園 3(8)』日本庭園協会、1921年、pp.2-6。

## 参考サイト

HÔTEL de L'ALPAGE(ホテル・ドゥ・ラルパージュ)のオフィシャルサイト <https://hotelalpage.com/>(2021

年1月19日閲覧)

飯塚ペンション(諏訪郡原村)のオフィシャルサイト <http://www.lcv.ne.jp/iiduca/> (2021年2月3日閲覧)  
石の湯ロッジのオフィシャルサイト「創業60周年企画」 [https://ishinoyu.com/event\\_60\\_anniv](https://ishinoyu.com/event_60_anniv) (2021年2月3日閲覧)

石原ペンション(諏訪郡原村)のオフィシャルサイト [http://www.lcv.ne.jp/ishihara/#\\_blank](http://www.lcv.ne.jp/ishihara/#_blank) (2021年2月3日閲覧)

岩田ペンション(諏訪郡原村)のオフィシャルサイト <https://www.iwata-pension.com/> (2021年2月3日閲覧不能)

温泉山岳ホテル・アンデルマットのオフィシャルサイト「姉妹提携の歴史」 <https://www.anderstatt.co.jp/history/> (2021年1月20日閲覧)

上高地西糸屋山荘のオフィシャルサイト「山荘の概要」 <https://www.nishiitoaya.com/overview-2/> (2021年1月25日閲覧)

車山観光ホテル Blog「営業終了のお知らせ(平成29年3月31日)」 <http://blog.livedoor.jp/kankouho/> (2021年1月20日閲覧)

車山ハイランドホテルのオフィシャルサイト「車山ハイランドについて」 <https://highland-hotel.co.jp/about/> (2021年1月20日閲覧)

シャレー志賀のオフィシャルサイト <https://chalet-shiga.com/> (2021年2月3日閲覧)

週間ホテルレストラン HOTERES Online「長野のホテル玉峰が事業停止し破産手続、負債総額約2.2億円」(2015年6月1日配信) <http://www.hoteresonline.com/articles/342> (2021年2月3日閲覧)

長野県「国際友好・姉妹提携等の状況(令和2年10月現在)」 <https://www.pref.nagano.lg.jp/kokusai-kouryu/sangyo/kokusai-kouryu/kouryu/yuko/index.html> (2021年1月19日閲覧)

長野県大町市とインターラーケンの姉妹都市提携協定書 [https://www.1.greiki.net/city.otsu/reiki\\_honbun/x400\\_RG\\_00000724.html](https://www.1.greiki.net/city.otsu/reiki_honbun/x400_RG_00000724.html) (2021年1月16日閲覧)

日本電産サンキョー・オルゴール記念館すわのね「ものづくりの町・諏訪一地域と共に歩む確かな技術」 [https://suwanone.jp/suwa\\_musicbox/suwa](https://suwanone.jp/suwa_musicbox/suwa) (2021年1月18日閲覧)

野沢グランドホテルのオフィシャルサイト中の歴史年表 <http://www.nozawagrand.com/ayumi.html> (2021年1月19日閲覧)

原村のオフィシャルサイト <https://www.vill.hara.lg.jp/docs/1525.html> (2021年2月3日閲覧)

ホテル銀嶺のオフィシャルサイト <http://www.ginrei.co.jp/info.htm> (2021年1月21日閲覧) ホテルグランフェニックス奥志賀ができるまで《田島和彦自伝》「37.夢を託したホテル、グランフェニックス」 <https://www.hotelgrandphenix.co.jp/autobiography/037.html> (2021年1月21日閲覧)

ホテルハイジのオフィシャルサイト <https://www.hotelheidi.co.jp/> (2020年5月20日閲覧)

ホテル・ハウルス志賀高原のオフィシャルサイト <http://www.khuls.com/> (2021年1月21日閲覧)

みすゞ設計のオフィシャルサイト「上高地インフォメーションセンター」 <https://misuzusekkei.com> (2021年1月20日閲覧)

ハケ岳ペンションのオフィシャルサイト [http://www.lcv.ne.jp/yatupen\\_1/index.html#\\_blank](http://www.lcv.ne.jp/yatupen_1/index.html#_blank) (2021年2月3日閲覧)

予約サイト「dトラベル」 <https://travel.dmkt-sp.jp/hotel/> (2021年1月21日閲覧)

予約サイト「トクー! (ToCoo!)」 <https://www.tocoo.jp> (2021年1月21日閲覧)

予約サイト「やど日本」 <http://www.ryokan.or.jp/inn/> (2021年1月21日閲覧)

予約サイト「るるぶトラベル」 <https://www.rurubu.travel/hotel/japan/> (2021年1月21日閲覧)